大岩勇夫（おおいわいさお）

一誠一貫、名古屋市政のため

－モダンな国際都市を目指した名市長－

大岩勇夫（1873 ～ 1954）
肖像画：愛知県公文書館蔵

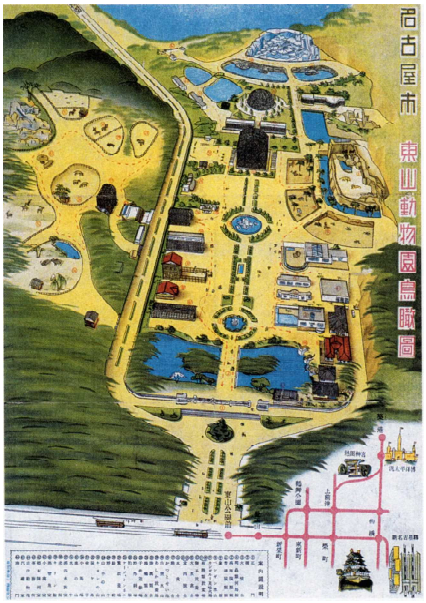
■その生涯

三河国加茂郡花本村（現・愛知県豊田市）に生まれた。東京法学院（現・中央大学）に学び、弁護士となる。1899年に愛知県会議員に選出されたのち、1910年からは名古屋市会議員に転じて5期17年在職し、地方政界の重鎮となった。この間1915年には衆議院議員に当選し1期務めた。1927年に市長に就任、1938年まで3期11年半にわたり市政を担った。ほかに名古屋弁護士会会長、名古屋商業会議所特別議員・顧問などの要職を歴任した。

■大岩市政の特徴

任期途中で辞任した田阪千助市長のあとを受けて、市会多数派の憲政会～立憲民政党系の重鎮で市会議長であった大岩勇夫が市長に就任した。当時、大都市の市長の再選は稀であり任期半ばの辞任も多かったが、名古屋では地元に精通した大岩が堅実な市政運営を展開し、安定政権となった。大岩市長はモダンな国際都市を目指し都市経営を着実に進めた。東山公園の整備では市が財政難のなか、大岩が自ら現地へ赴いて地元地主と交渉した結果、公園用地のほとんどを地主からの無償提供で賄うことができた。

名古屋の人口は1935年の国勢調査で108万人に達し、国内第三位の大都市としての地位を確立した。国際的にみても上位30位以内の都市人口の規模となり、「世界の名古屋」が意識されるようになった。国際都市への発展には市役所と地元財界の連携が必要だったが、大岩市長は名古屋商工会議所副会頭（のち会頭）の青木鎌太郎と親しく、その協力を得たことで名古屋汎太平洋平和博覧会などのビッグプロジェクトを成功に導くことができた。



東山動物園の鳥観図と観覧券
出典：『新修名古屋市史』第五巻

■大岩市政のレガシー

「昭和二年市長就任以来、全国に類を見ない市公会堂の建設、中川運河の開さく、下水処理場及び市民病院の建設、増区の実施、西部下水幹線築造、教育施設の拡充、市庁舎の建設、乗合自動車事業の創設、名古屋汎太平洋平和博覧会の開催、東山動植物園の開園、産業、保健、社会事業、都市計画事業等その偉大なる事業は、今日の大名古屋市が近代都市として躍進的向上発展の基礎を築かれて、その功績は誠に甚大なものであります」（名古屋市市政資料館所蔵「叙勲綴」から引用）

（真野素行）

名古屋市庁舎　　出典：絵葉書『大名古屋十六景』愛知県図書館所蔵